

竹島(独島)を 地球共生と縁結びの島に

雄大な「地球ユートピアモデル事業」構想の実現に賭ける
小松電機産業・小松昭夫社長



小松電機産業と小松昭夫社長のプロフィール

1944年島根県生まれ。島根県立松江工業高等学校。73年、小松産業設立。83年に小松電機産業(株)とする。85年、シートシャッター「門番」を開発・発表する。94年、HNS(人間・自然・科学)研究所設立。ベンチャービジネスの旗手として中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞、科学技術庁注目発明選定証、地域活性化貢献企業賞など数々の賞を受ける。資本金1億円。従業員85人。年商42億円。

国家から団体、企業、そして個人へと広がるボーダーレス化の時代にあって、朝鮮半島の対岸に位置する出雲で、日韓交流に「役買つて」いる、決して大きいわけではないが、新たな視点と具体性をもったベンチャー企業がある。この会社が「日本」と「韓国」という既成の国家概念にとらわれず、ただ利益を追求するものとしての企業、という枠をも超越して立ち上げようとしているのが「地球ユートピアモデル事業」構想。この壮大なプロジェクトを中心として、これから日韓関係、そしてアジア・世界の共生をめざす同氏の一大チャレンジを紹介する。(編集部)

出雲発世界へ

「小松電機産業」という少々堅そうな社名をもつこの会社は、ベンチャービジネスの旗手と称される創業社長、小松昭夫氏によって、一九七三年に島根県の八雲村で小松産業として創設された。八五年には同社のヒット商品であるシートシャッター「門番」を開発し、以降上下水道の制御・監視システム「水神」を世に送り出すなど、新しいテクノロジーを応用した制御システムメーカーとして素晴らしい実績をあげている。しかし、この会社も創業当時は現金

一〇万円、五万円の中古車一台、そして工具箱がひとつ。これを元手に、ポンプの修理業からスタートした。

社長の小松氏は、田畠五反を耕す農家の出身。技術系の高校を卒業してすぐに、農業機械メーカーに就職、その会社の研究所に入り、耕耘機のトランスマッションの開発を専門に八年間勤め、その後独立。弟と一緒に二人で実家の納屋に作業場を作り、ポンプの修理から配電盤や制御盤の製作へと事業を展開していく。そこへ来た依頼のひとつが「金属ではなくシートでシャッターを作れないか」というもので、開発されたのが高速シートシャッター「門番」である。これにより同社は飛躍的な発展を遂げ、さらにビジネスを拡大し、今日に至っている。

小松社長の経営理念・哲学はとてもなくスケールが大きい。「生命の誕生から、人類の誕生、そして人間とは何かということから長期的、多面的、根源的に考えることによって、ものごとの本質がわかる」として、「飢餓と殺りくのない、自然と歴史の中で生かされ、共に楽しく愉快に暮らすことのできる地球社会の創造」という目的に向かって、渾身の情熱を注ぐ。

八年に制定された社是「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」のも

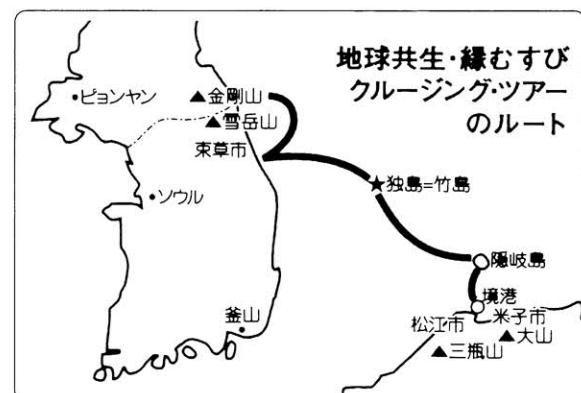


小松社長が日韓交流の必要性を考えるようになったのには、いくつかのきっかけがあった。二〇年ほど前に戒厳令下の韓国へ観光に行つたときのことだ。氏は韓国の友人とタク

と、出雲や日本国内にとどまらず、竹島（独島）を地球共生と縁むすびの島にしようという構想を持つに至る。それは、中・朝・ロ三つの国境をまたぐ豆満江開発等とリンクさせた、東北アジア地域の国際交流はもとより、世界を視野においた巨大な夢のプロジェクトだ。

日韓交流のきっかけ

この壮大なプロジェクトは非常に大きなテーマを持つものであり、小松氏の深奥な経営哲学、人生哲学、世界観から生み出されたものだ。「民族や宗教、国家間紛争や、環境・エネルギー問題、極端な拝金主義、人心の荒廃。アジア地域に関していえば最近のテボドン発射事件、金融・通貨危機等、二十一世紀を前にして、人類は様々な危機に直面している」との認識がある。



確かに、日韓関係の発展を考えると、中小企業やベンチャーエンタープライズへの技術交流がもつとあるべきなのだろう。それをさらに前進させるべく、一〇年間構想を推し進めてきたのが小松氏とその仲間にによる一大プロジェクト「地球ユートピアモデル事業」構想である。

小松社長は、「より良い現代社会の創造をうながすためには、それぞれの土地のもつてゐる歴史的・地政学的な使命を引き出すことが重要だ」ということなのだ。

小松社長は、「より良い現代社会の創造をうながすためには、それぞれの土地のもつてゐる歴史的・地政学的な使命を引き出すことが重要だ」ということだ。氏はこう語る。

問題は、この大きなテーマを経済的混乱の現状から、どう具体化していくかということだが、まず以下に述べる四つのプロジェクトを推進するという。関係諸国の方々の協力を仰ぎながら、プロジェクトの構想・調査・設計・建設・完成後の運営の各段階を事前に議論・研究する中で、全地球的な問題となつてゐる環境問題と相互信頼関係の喪失という社会問題

シーに乗つていた。そこへ相乗りしてきた一人の客が、氏が日本人と判るや「こいつを放り出せ」と怒り始めた。しかし、韓国の友人と運転手は「この人は私の客だ」とその相手と口論をしてくれた。この体験が記憶に焼き付いて離れないという。また内閣国防会議の元事務局長・海原治氏の講演で「韓国人の人と付き合うには、七奪と閔妃事件を理解しないとダメだ」という話を聞き、松江ライオンズクラブに入会、国際委員会委員長として、韓国クラブと交流し、さらには島根県日韓親善協会にも入会。以降、韓国の東宇技研との業務提携を始めとして、韓国の独立記念館には苦しむ人たちのために五〇〇〇万円を寄付する。特筆すべきは、韓国ベンチャーエンタープライズへのシートシャッターの技術の無償供与だ。同社にとって、必ずしも金銭的メリットがあるわけではない。「今を生きる日本人として自分にできることを考えたら自然にできたことだ」氏はこう語る。

確かに、日韓関係の発展を考えると、中小企業やベンチャーエンタープライズへの技術交流がもつとあるべきなのだろう。それをさらに前進させるべく、一〇年間構想を推し進めてきたのが小松氏とその仲間にによる一大プロジェクト「地球ユートピアモデル事業」構想である。

Asia Venture

98年7月7日、韓国赤十字社にて目録の授与



を解決する糸口を見出そうとするものだ。これによって、当事国だけではなく世界の過去のしがらみに苦しむ人々にとってのモデルケースとなる可能性は大きいにある。

(一) 人縁・感謝と

戦争の歴史記念館

今を生きる日本人の責任と義務において、インター・ナショナルプロジェクトとして、日本の国際交流の歴史を「人」に焦点を当て、歴史上の関係諸国にも協力を要請し、史実を調査する。また、過去の戦争に関しては、当事国双方の中には共通の事実認識が生まれたものから背景・原因・経緯を共同研究し、その成果を

わかりやすく展示。日韓両国民はもとより、世界の人々およびその子孫共有の知的財産として残そうというものである。

(二) ゼロエミッショントリニティ

小規模理想郷

深刻化しつつある環境・食糧・エネルギー問題解決のため、先端技術と自然とを高次元で融合、島根・鳥取両県境の中海にEMBC工学を応用した爆発的生命連鎖海洋牧場や有機農業田園都市、海山理想住空間などを構築。自然循環のなかで文化的な社会生活が自立・存続することを証明し、二一世紀の新生活提案をしようというものだ。

(三) 心の首都。

松江市市街地再開発構想

人心の荒廃が著しい現代において人間本来の価値観(利己から利他へ)を育む場の創出をめざすとともに、松江市中心部に「心の首都」を建設し、「人物」の創出と「人財」養成の場を設けようというものだ。さらに、このプロジェクトに関心をもち、二一世紀を模索する人々の出会い(縁むすび)の場にしていくといふ。

(四) 未来を開く研究所。

教育機関

本事業を具現化するための議論・構想・調査・設計・建設・完成後の運営の各段階を通じて「実学」を学ぶことのできる研究、教育機関を開設

する。島根・松江の地域開発のための「人財」育成にとどまらず、世界に向かって「人財」を輩出するための機関を立ち上げようというものだ。

具体化・発展の可能性は

このような雄大かつ具体的な構想が成功すれば、地域活性や、景気高揚のみならず、新たな国際交流ががっていくことは間違いない。小松氏は、このプロジェクトを二〇〇〇年までに着手したいとしている。そのためには自分の個人財産も開発費に充てる覚悟であるともいう。それほどこのプロジェクトに自己の全てを賭けているのだ。一部地域の発展だけを考えることなく、事業や「人財」の交流を出雲から、韓国、中国、北朝鮮、ロシア沿海州はもとより、世界にまで広げることによって、相互発展していくというのだ。豆満江開発や、金剛山観光開発といった東北アジア地域の事業とリンクさせていけば、出雲がこの地域の国際交流の中心となる可能性も大きいにある。このような真の意味での国際的な視野を持った事業とプロジェクトを時代は求めている。これから具体的な展開に向けて、小松電機産業の動きと、小松社長の手腕に期待したい。